

L2023 - 1

2023 年度
市川中学校 第 1 回 入学試験問題

国 語

50分 100点満点

2023 年 1 月 20 日^{じっし}実施

^{じこう}
【注意事項】

1. ^{かんとく} 監督者の指示に従い、本冊子より解答用紙を取り出し、冊子を閉じた後、試験開始のチャイムが鳴るまで、冊子の中を開いて見ないこと。
2. 取り出した解答用紙に受験番号シールを^は貼り、裏返しの状態にした後、解答用紙の上に問題冊子を置くこと。
3. 試験開始後、解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
4. 試験^{しゅうりょう}終了のチャイムが鳴ったらすぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏返しの状態にすること。
5. チャイムが鳴っている間に記入した解答は、無効にすることがある。
6. 問題冊子は各自で持ち帰り、解答用紙は必ず提出すること。
7. 答えはすべて「解答らん」に書き入れること。
8. 解答の際には、句読点や記号は1字と数えること。
9. コンパス・定規は使用しないこと。

一 次の「文章Ⅰ」は、佐藤喜和「となりのヒグマ——アーバン・ベア問題とはなにか」の全文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および一部表記を変えたところがある。

【文章Ⅰ】

人口一九五万人が暮らす札幌市の市街地中心部にヒグマが出没し四名に重軽傷を負わせた、という¹衝撃的なニュースが全国を駆け巡ったのは二〇二一年六月一八日のことだった。大型ショッピングモールの中をのぞきこみ、住宅街を駆け抜け、そして人に襲いかかるヒグマが、テレビカメラや、市民の撮影した動画を通じて拡散された。このヒグマが住宅街を抜けて丘^{おか}珠空港の北東に広がる郊外農地の緑地に入り込んだところで駆除されたのは、最初の人身被害が発生してから約六時間後のこと、もともと市街地中心部に接近した地点は札幌駅まで直線で約三キロメートルしかなかった。

…（中略）…

アーバン・ベアとは、市街地周辺に生息し、その行動圏の一部に市街地が含まれる、または含まれる可能性のあるクマのことを指す。クマ類はその生存に広い行動圏を必要とするため、※アーバン・フォックスや一部のアーバン・ディアのように、その※生活史全体を市街地の中で完結することはないが、一時的であれ市街地に出没しただけで、市民の安心安全な生活を脅かす問題となる。北海道では近年、札幌市だけでなく、旭川市や帯広市などの地方都市においても市街地中心部にまでヒグマが出没する事例が発生するようになった。本州においても、長野市や金沢市の中心部にまでツキノワグマが出没する事例が生じており、アーバン・ベア問題は北海道だけの問題にとどまらない。

札幌市の南西部に広がる広大な森林は今やそのどこにでもヒグマが※恒常的に生息している。隣接する郊外の農地や果樹園では毎年のようにヒグマが出没し、森林に接した住宅街でもヒグマの目撃がめずらしいことではなくなった。しかし冒頭に紹介したこの個体は、まだ成獣になりきらない四歳の若いオスで、南西部の森からは遠く離れた北東部の石狩川河口に近い※河

畔林で最初に目撃された。隣接地域の痕跡発見状況から、石狩川を越えて北から侵入し、その後二〇日間ほど石狩川の治水事業でできた三日月湖である茨戸川の周辺緑地に滞在して、草本類のほか、フナなどの川魚を食べて過ごしていたと考えられている。これまでヒグマの目撃情報さえなかった場所であったが、なんらかの理由でヒグマがたどり着いてみれば、人目にもつかずにひっそりと、人由来ではなく自然のものを食べて長期滞在できる豊かな場所となっていたわけである。また、その後このクマが市街地の中にまで侵入してしまうきっかけにながったのかは不明だが、その経路として、茨戸川につながる伏籠川とその周辺の水路を辿ったと考えられた。これらの石狩川河口付近や茨戸川周辺、伏籠川など河川沿いの緑地は、都市緑化の一環として「札幌市みどりの基本計画」において環状グリーンベルト、水を中心としたみどりのネットワーク（※コリド

ー）として「持続可能なグリーンシティさっぽろ」の実現に向け緑化や保全が進められている場所にあたる。同じく六月から旭川市の中心部の河畔林（旭川駅に接する忠別川、美瑛川、および石狩川）にヒグマが一ヶ月以上滞在し、人身被害こそ発生しなかったものの、歩行者が近距離で目撃するなど不安な状況が続いたことも記憶に新しい。ヒグマが滞在していた場所は恒常的な生息地からは少なくとも一〇キロメートル以上離れているが、河川沿いに発達した河畔林を伝って移動してきたと考えられる。こうした河畔林は、河川管理の分野で進められる多自然型の川づくり、河川を通じた生態系ネットワークの復元のために重要な場所と認識されている。

クマ側の視点に立って²人の生活圏に出没する動機を考えると、まず多いのは従来の農村部への出没のように、郊外の緑の多い住宅地で山際に残る農地や果樹園、大規模な市民農園、家庭菜園などで栽培される野菜や果実を食べるため、晩夏（八月～九月）に出没して食害する場合、また※誘因がないように見える住宅街に接した緑地や公園への出没では、サクラ類やオニグルミなどの樹木がつける木の実を食べるために出没する場合がある。しかし、市街地の内部にまで侵入するような事例は、例外はあるものの、多くは初夏の繁殖期に発生しており、なにか食べ物を求めて出没するのではなく、ましてや人を襲うために出没するのではない。親から独立した若いオスが出生地から離れて分散していく過程で、またはクマ社会の個体間関係から、

新たな生息場所を求めて移動する途中に、森林から市街地へと伸びる河畔林などの緑地に入り込んでしまい、緑地の切れ目から横にそれたら突然街中に現れてしまうというような事例が多い。市街地中心部に入りたいと思っているクマがいるのではなく、たまたま迷い込むと、人に気づかれないまま市街地中心部にまでたどり着いてしまうような河畔林や緑地が存在することに原因があるように思える。そしてそれはクマの恒常的生息地である大きな森林から街中まで河畔林や緑地のネットワークでつなぐことを目指した街づくり計画、河川管理計画により創出、保全、再生されている。その意味で、アーバン・ベア問題は、出沒地域の住民にとっても深刻な問題であるが、出沒するクマにとっても、意図せずに市街地中心部に出沒してしまうという点で問題である。それは、緑豊かで生きもののにぎわいある街づくりという、**3** 社会的に正義とされる施策が進展した結果もたらされた負の側面ともいえるのではないか。

これまで、クマによる **※** 軋轢の代表であった山林内の人身被害や農作物の被害に関しては、クマが恒常的に暮らす森に立ち入る人、誘因となる農作物をつくる人の問題であり、十分な知識と対策、**※** 未然防除なくして根本的な解決はないとしながらも、被害は入林者や農業者に限定された問題であり、**※** 対症療法としての **※** 有害駆除依存で被害意識が低減するのであれば、クマの地域個体群に絶滅のおそれがない限りその対策を許容してきたという側面がある。しかし、**4** アーバン・ベア問題はこれとはまったく異なる。ある日突然街中に現れるクマに対し、街の中でクマとの接点なく日常を暮らす人の安全をどう守るか、という従来の鳥獣害対策の認識では対処しきれない問題に大きく変化した。しかもその問題は、たんにクマの生息数増加や分布拡大だけによるのではなく、都市計画や河川管理計画の中で進められてきた自然保護を根底とした街づくりの結果としてもたらされている。一度起こるとリスクが高いが、いつ発生するか予測はむずかしく、その発生頻度は今のところ低いという点からも、アーバン・ベア問題は従来の鳥獣害より、地震や津波や台風、大雨などの自然災害に近い。国や地域をあげての防災としての取り組みが求められている。

現在、クマ類をはじめとする野生鳥獣の問題は、行政の鳥獣担当者が対応している。森の中のヒグマをモニタリングし、出沒や被害の発生状況を調べ、問題個体をつくらないように、また侵入を防ぐように未然防除、被害発生時に緊急対応するのは、そして人身事故を減らし被害を減らすために **※** 普及啓発するのは鳥獣担当部署の仕事だろう。しかし、従来の対症療法としての駆除を一つとってみても、市街地の中では確実に実行できる体制さえ確保されていないのに、未然防除として、市街地の内部にクマが出沒しにくい街づくりを都市計画に含め、都市住民の安全な暮らし確保に備えるのは、鳥獣担当者の仕事としては重すぎる。同時に、都市における緑のネットワークや河川を通じた生態系ネットワークの復元は、生物多様性保全だけでなく、地域の魅力や活力、日常生活の豊かさにもつながる。さらにその豊かな自然環境が国内外の観光客から見ても魅力的な街であることも求められている。クマの市街地侵入は、つねに専門家や行政担当者の想像を超えたところで発生し続けているし、その頻度は、今のままでは増加することはあっても減ることはないのは確かだ。**5** まれな災害への備えと、日常生活の豊かさを両立するためにどのような選択が必要なのか、防災の取り組みを参考に、鳥獣や農林の部局だけでなく、都市計画や教育、観光など多様な部局横断で議論を始めるときがきたのではないだろうか。

日本の自然災害の予測レベルは高く、発生時の対応も進んでいる。それは、まれではあるが、いつか確実に起こる自然災害の特性とそれに備える重要性を広く国民が理解し、その発生を予測すべく日常から精度の高い観測に予算と人員を割いているからだ。新型コロナウイルス対策にしても、医療従事者による緊急対応体制の確保だけでなく、感染者数の推移や感染経路、新たな変異株の出現がつねにモニタリングされているからこそ、大規模な感染爆発を抑えることができる。

6 翻って鳥獣害対策を見れば、クマに限らず、シカ、イノシシ、サル、いずれも発生頻度は右肩上がり、発生地点も農村部から大都市の中心部にまで拡大中である。日常的な観測、変化の発見、予防対策、発生時の緊急対策、いずれをとっても予算と人員が必要である。環境省自然環境局長からの審議依頼を受けた日本学術会議 **6** 人口縮小社会における野生動物管理のあり方の検討に関する委員会の答申の中でも、高度専門職人材の配置が提言された。国、都道府県、市町村、さらに小さな地域単位で、防災と同様の組織づくりと、専門性の高い人材の配置がなければ、今後も発生し続ける市街地侵入に対し、なす術のな

いまま、都市住民が危険にさらされていくだろう。次いつ起こるかわからないアーバン・ベア対策に、予算を割き、部局横断の組織づくりと専門人材配置を進めなければいけない時期にきている。

※アーバン・フォックスや一部のアーバン・ディア：フォックスはキツネ、ディアはシカのこと。

※生活史：ある動物の一生。

※恒常的に：つねに。

※河畔林：川の周辺の森林。

※コリドー：通り道。

※誘因：ものが生じる原因。

※軋轢：仲が悪くなること。

※未然防除：事前に問題の原因を取りのぞくこと。

※対症療法：根本的な原因を解決せずに、生じている問題点だけを解消すること。

※有害駆除：人間にとって有害と判断された動物を駆除すること。

※普及啓発：人びとに専門的な知識を広めること。

問1 — 線1「衝撃的なニュース」とあるが、このニュースで筆者が注目している点は何か。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 札幌市中心部にクマが出没することは最近では多く発生しているが、負傷者が複数名も出たという点。

イ 札幌市中心部にクマが出没し負傷者が出ただけでなく、その様子が市民の撮影した動画により人々の間で広く拡散されたという点。

ウ 北海道の地方都市や本州の各都市でクマが出没することはめずらしくはないが、札幌市でのクマの出没は今回が初めてだったという点。

エ 札幌市中心部にクマが出没し負傷者が出ただけでなく、クマが生息している森から遠く離れた市の北東部から侵入したという点。

オ 札幌市中心部にクマが出没することは最近では多く発生しているが、今回のような若いクマが出没することはめつたにないという点。

問2 ―線2「人の生活圏に出没する」とあるが、ヒグマが人の生活圏に出没する理由はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 住宅地の近くで栽培されている農作物を食べるためというものと、住宅街近くの緑地や公園に植えられている樹木がつける木の実を食べるためというもの。

イ 人間の住む場所の近くにある食べ物を得るためというものと、新たな生息場所を求めて移動するうちに緑地に隣接した市街地周辺にまで達してしまうためというもの。

ウ 人間の住む場所に存在する人間の食べ物を好むためというものと、森林よりも生態系が多様である市街地周辺の緑地を生息場所として好むためというもの。

エ 住宅地近くの緑地や公園の樹木がつける木の実を手に入れるためというものと、市街地の中心部に豊富に存在する人間の食べ物を得るためというもの。

オ 人間の住む場所の近くに存在する豊富な食べ物を得るためというものと、新たな生息場所として市街地周辺の緑地を選ばざるをえないためというもの。

問3 ―線3「社会的に正義とされる施策」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 都市開発や河川管理を進めるにあたって、都市と生きものの多い森を緑地でつなぐことで、市街地中心部でも動物にふれることができるように計画するという、多くの人びとが進めるべきだと思っている施策。

イ 都市開発や河川管理を進めるにあたって、市街地周辺の緑地を回復することで、生活の便利さよりも自然環境の豊かさを優先するように計画するという、多くの人びとが理想的だと思っている施策。

ウ 都市開発や河川管理を進めるにあたって、市街地中心部に緑地を整備することで、市街地の利便性と生物多様性に満たした自然を両立するように計画するという、多くの人びとが適切だと思っている施策。

エ 都市開発や河川管理を進めるにあたって、市街地周辺に生きものの多い緑地を増やすことで、市街地に活気を取りもどすように計画するという、多くの人びとが必要だと思っている施策。

オ 都市開発や河川管理を進めるにあたって、都市と生きもののすむ森を緑地で結ぶことで、自然が多く多様な生態系を持つ環境となるように計画するという、多くの人びとが正しいと思っている施策。

問4 — 線4「アーバン・ベア問題はこれとはまったく異なる」とあるが、従来のヒグマ問題とアーバン・ベア問題のちがいはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 従来のヒグマ問題はヒグマに慣れている山林や農村で活動する人たちに限定され、人身被害は起きにくいいため、未然防除は必ずしも必要ではなかったのに対し、アーバン・ベア問題はヒグマに慣れていない都市生活者が対象となり、人身被害の危険性が高いため、未然防除が必要になるといふちがい。

イ 従来のヒグマ問題はヒグマが多く生息する山林と農村で起きるため、現地の職員も専門的な対応に慣れており、対症療法的な手段を用いることができたのに対し、アーバン・ベア問題はめったにヒグマが出ない市街地で起きるため、職員が対応に慣れておらず、対症療法的な手段を用いるのが難しいといふちがい。

ウ 従来のヒグマ問題は山林と農村に集中しており、ヒグマを引き寄せる農作物の対策に限定できるため、未然防除がしやすかったのに対し、アーバン・ベア問題はヒグマを引き寄せる原因となるものがない市街地で発生するため、未然防除に限らない対症療法的な解決が必要であるといふちがい。

エ 従来のヒグマ問題は出現がある程度予想される山林と農村で発生し、被害を受ける人もその場所に関わる人に限られるため、対症療法的な対応をしてきたのに対し、アーバン・ベア問題は予測不可能な市街地で発生し、だれが被害を受けてもおかしくないため、対症療法的な対応だけでは解決できないといふちがい。

オ 従来のヒグマ問題は人口の少ない山林と農村に限定され、生じる被害も大きくないため、未然防除がしやすかったのに対し、アーバン・ベア問題は大都市にヒグマが出現するものであり、自然災害のような大きな被害をもたらすものであるため、未然防除では対処しきれなくなったといふちがい。

問5 — 線5「まれな災害への備えと、日常生活の豊かさを両立する」とあるが、それはどういうことか。「両立する」ために必要となることを明らかにしながら、70字以内で説明しなさい。

問6 — 線6「人口縮小社会における野生動物管理のあり方」とあるが、【文章Ⅰ】を読んだ市川さんは、「人口縮小社会」と「野生動物管理」がなぜ関連するのかということに疑問を持ち、図書館で次の【文章Ⅱ】と【図】を見つけた。市川さんは【文章Ⅱ】と【図】から、人口減少とアーバン・ベア問題の関係性に気がつき、それを文章にまとめた。市川さんのまとめとして最も適当なものを後のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

【文章Ⅱ】

農村部では、都市に先行して人口減少、高齢化が進行し、人の勢いは今後必然的に衰えていく。農業や林業従事者、狩猟者も減少・高齢化していく。手入れされない森林、耕作されない農地が増え、山菜やキノコ採り、釣りや狩猟などを目的に森のなかで活動する人の数も減少していくだろう。農業経営はさらに大規模機械化・自動化が進み、農地ではますます人を見かけなくなっていくだろう。その結果、ヒグマは今よりさらに容易に農地に接近できるようになり、畑作地帯にあるビートやスイートコーンや小麦などはますますヒグマに利用されるようになっていくだろう。

(佐藤喜和『アーバン・ベア とのりのヒグマと向き合う』)

ゾーニングで対処する

人とヒグマが会わないために、ゾーニングという考え方があります。
ゾーニングとは「場所を分ける」ということです。
その場所ごとに、どうヒグマとのことを考えるかが大事になります。



【図】札幌市ヒグマ対策委員会事務局編『子ども版さつぽろヒグマ基本計画』

みなさんの住んでいる場所は、
どのゾーンでしょうか？
遊びに行く場所は
どのゾーンになるでしょうか？



ア 市街地周辺ゾーンである農村部の高齢化と人口減少により、放置された農地の森林化が進むと、クマの生息地である森林ゾーンと人間が多く住む市街地ゾーンが直接つながることになり、クマが市街地ゾーンに入りこめるようになる。

イ 森林ゾーンと市街地ゾーンの間に位置する市街地周辺ゾーンである農村部は、市街地ゾーンに侵入しようとするクマを事前に駆除するための重要な場所であるが、狩猟者の高齢化や減少が進むと、駆除できるクマの数が減ってしまう。

ウ 市街地周辺ゾーンである農村部で人間の活動があると、森林ゾーンから市街地ゾーンへのクマの移動をおさえることができるが、農村部の高齢化と人口減少が進み人間の活動が減ると、クマが市街地ゾーンへ入りこみやすくなる。

エ 市街地周辺ゾーンである農村部の農地の作物が豊富だと、クマは市街地ゾーンまで出ようとはしないが、農村部の高齢化と人口減少により耕作されない農地が増えて作物が減ると、クマが食べ物求めて市街地ゾーンへ出てくるようになる。

オ 市街地周辺ゾーンである農村部の高齢化と人口減少が進み、さらに農業の機械化や自動化により人が減ると、クマは人目につくことなく農村部に侵入できるようになり、市街地周辺ゾーンの農作物の被害が増えていくことになる。

二 次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】は、いずれも大島真寿美「うまれたての星」の一部である。1960年代末、人類史上初の有人月面着陸を試みるアポロ11号に世界中の人々が注目していた。そんななか辰巳牧子は、少女漫画を作っている出版社の編集部、編集の仕事とは直接関係のない経理補助として配属されたばかりである。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および一部表記を変えたところがある。

【文章Ⅰ】 牧子はアポロ11号の月面着陸をテレビで見るために訪れた定食屋で、漫画編集の中心となって忙しく働く西口克子に偶然出会った。

「ねえ、誰か、さがしてるの？ 待ち合わせ？」

きかれて、うっかり口が滑ってしまった。

「アポロを」

西口克子が、はあ？ と聞き返す。

「あ、いや。ちがった。テレビ。テレビを、さがしてました」

「テレビ？ テレビは、このお店にはないけど？」

「え。そうなんですか」

いかにもありそうな外観なのに、と牧子はがっかりする。するとまた克子が笑う。

「お。がっかりしてる！ いかにもがっかりしてる！ あなた、わかりやすいわねえ。いちいち漫画みたいに動くのね。辰巳さん、漫画好きでしょう」

1 うーん、と牧子は考える。

どうなんだろう？

牧子はまだそんなに漫画を知らない。この部署へ配属されて、少女漫画の面白さに目覚めたところではあるけれど、はたして、そんな程度で大きな顔して、好きです、なんていっていいものだろうか。いや、好きは好きだけど、それも、もしかしたらものすごく好きなんじゃないかという気はしてきているけれど、こんな大先輩を前に好きっていったら、いろいろきかれて、そんなに知らないことがばれちゃって恥ずかしい思いをするかもしれない。うーん、どう答えるべきか、と考え込んでいたら、おすわんなさいよ、と向かい側の椅子をすすめられた。いいから早くおすわんなさいよ、どうせ相席になるんだから、あなたがすわってくれたほうがいいの、ほら、すわってすわって、おばちゃん、ここ日替わり定食もう一つ追加ね、と注文までしてくれた。

「即答できないってことは、辰巳さん、もしかして漫画、好きじゃないの？」

と克子がまたきいた。「いいから、正直にいっちゃいなさいよ」

「えっ、いや、ちがいますちがいます、好きです好きです。好きなんですけど、んー、でも、ええと、じつはわたし、まだ、あんまり知らなくて」

「え、なにを？ 漫画を？」

「わたし、小さい頃から本はふつうに読んでたんですけど、漫画はほとんど読んでこなくて。あと、弟がいるんで、少年漫画はたまーに読んでましたけど、少女漫画はお友達の家とかで、ほんとに少し読んだくらいで。それもけっこう小さい頃で。漫画は学校の図書室にもなかったし。だから《別冊デイズ》も《週刊デイズ》も知らなくて。名前はなんとなくきいたことがあったけど読んだことはなくて。ここで働くようになってはじめて読んだんです」

「あらー。で、どうだった」

「とてもおもしろいです。おもしろくて、おもしろすぎて、びっくりしました」

「お。うれしいことってくれるじゃないの」

2 お世辞でもなんでもなく、牧子は本当にびっくりしたのだった。子供の頃、牧子が読んでいた少女漫画は、もともとずっと素朴で幼い感じがしていたし、ほのぼのとした地味なものが多かったように記憶しているが、《別冊デイズ》や《週刊デイズ》に載っている漫画は、現代적でおしゃれで、子供向きといえれば子供向きだけど、絵も華やかだし、カラーページはきれいだし、お話も起伏に富んでいておもしろく、すっかり夢中になってしまったのだった。子供向けどころか、牧子くらいの年齢で読んでもじゅうぶんに楽しめる。というか、牧子の嗜好にぴったり合っている。

いったい、いつの間に少女漫画はこんなふうになっていたんだろう？

くわしいことはわからないけれど、ここにはあたしをわくわくさせるものがある気がする、と牧子は思ったのだった。

【文章Ⅱ】 結局牧子はアポロ11号の月面着陸を見られなかった。母と弟の慎也と三人で住む家に牧子が帰ると、叔母の和子と和子の娘である千秋が家を訪れており、一緒にニュースで着陸場面を見ることになった。アポロを見せようと和子がいくら呼んでも、千秋は返事をしない。

さすがにアポロも月もじゅうぶんに見た気がして、牧子は立ち上がると、テレビを消した。居間から出ていくついでに襖をあけて隣室を覗いたら、千秋が畳に寝そべってなにか読んでいた。

「なによんでんの」

なんとなくきいてみた。

こたえはない。

きこえなかったのかと思って、

「千秋、なによんでんの」

もう一度きいた。

んー、と千秋が雑誌をちよつと上に持ち上げる。

ちらりと表紙が見えた。

大きな貝を持った、外国人の女の子。

「え、別デ？」

あれは、夏休みおたのしみ号と銘打たれた最新号——八月号——だ。

「千秋、それって、別冊デイジーじゃない」

「んー」

とA生返事がかえってくる。

「あんた、そんなの、読めるの？」

千秋は四月に小学校へ上がったばかりの一年生。

別冊デイジーの読者としては小さすぎる気がするが、そんなことないのだろうか。

「よめるー」

と千秋がこたえる。

「へー、読めるんだ。……ねえ、それって、わたしの別デでしょ。わたしの部屋にあったやつでしょ」

「そうー」

こたえつつも、千秋の目は別デからまったく離れない。小学一年生ながら千秋はたしかに別デが読めているようだった。それどころか夢中になって読んでいるようにも思われる。子供ならではの集中力で、いや、おそらく牧子なんかより遥かに集中

して、千秋は別デに没頭している。

a すいっとページをめくる。

ときおり、ばたんばたん足が不規則に動く。頭が少し傾いたり、また元に戻ったりする。

そのすべてが千秋の心のうちを表しているようで、やけに楽しげにみえた。

牧子は、ほー、と声を出してしまった。

こんな小さな子供でも、別デの面白さがわかるんだ。

それにしても、この雑誌をよくぞ見つけたものではないか、と牧子は感心する。

別デは牧子の部屋の机に置いてはあったものの、他の本が上に無造作に重ねてあって、ちよつとみたくらいではわからないようになっていた、はずなのだ。

いくら自分の働いている職場で作っているとはいえ、少女漫画をひそかに楽しむようになっていたなんて、誰にも知られなかったし、漫画に時間を費やすなんて、あまり褒められたものではない気がしたし、それになにより家族に職場のことを詮索されたくないという気持ちが強くて、だから、隠すというほどではないにせよ、なるべく目立たないようにしていたのだが、まさか千秋に嗅ぎつけられるとは思わなかった。

牧子は家で職場の話は滅多にしない。

なにかたずねられても、当たり障りのないことしかいわない。

うまくやってるよ、楽しいよ、そんなふうに分かることだけ強調して、てきとうにはぐらかしている。

出版社で働いているといったって、所詮、牧子は経理補助。仕事の内容について、くわしいことはなにもわからないし、それを認めるのも嫌だったし、かといって、知ったかぶりして、その挙句、こたえに詰まって、みじめな気持ちになりたくなかった。

わたしは女中、わたしはお手伝いさん。

話せば話すだけ、その正体があらさまになってしまふのだから、³なるべく家では仕事の話をしたくなかつたし、ましてや少女漫画の話など決してするものか、と思つていた。

それなのに。

牧子は、今、ふつふつと誇らしいような気持ちになっている。

その感情に抗えなくなっている。

あれは別冊デイジ！

千秋があんなにも夢中になって読んでいるのは、わたしの職場で作っている雑誌。

「ねえ、おもしろい？」

千秋にきいた。

「ねえ、千秋、それおもしろい？」

自分が作つたわけでもないのに、まるで自分が作つたかのような錯覚すら起きはじめている。

「ねえ、どうなのよ、千秋。それ、おもしろいの？」

千秋の姿をみればきかなくなつてこたえはわかつている。それでも牧子はきかずにいられなかった。

「んー、おもしろいよー」

千秋の声がする。

うれしい。

なんともいえない喜ばしさが牧子の内から湧き上がってくる。

「ねえ、千秋、それさ、その別デさ、わたしが働いている会社で作ってるんだよ！」

ついにいつてしまった。

千秋が牧子をみる。そして、また別デに目を落とす。そうしてまたすぐに牧子をみる。

「そうそう、それ、その本。わたしの会社で作つてんの。その別デはね、買ったんじゃないの。編集長さんからいただいたの！わかる？ 編集長さんっていうのはね、その雑誌を作っているところにいる、いちばん偉い人」

「へえ」

うすい反応、かと思つたが千秋がいきなり、ひょいと起き上がった。別デを膝に置き、牧子と別デを交互にみる。

牧子がうなずくと、千秋もうなずいた。

「そうなんだ」

ひとことそういうと、じつと表紙をみつめ、しかしまたすぐに読みかけのページをさがして開く。わかっているのかいないのか、それ以上、なにもいわず、なにもきかず、^d あつさりまた別デの世界に戻つていつてしまった。

蛍光灯の笠の真下で俯いて読んでいるから、手暗がりになつて読みにくかろうと思うが、千秋はまったく気にしていない。

目が悪くなるよ、と注意すべきかどうか。

迷いつつ、黙つたまま、牧子は心の中でつぶやいた。

うー、わかるよ、千秋、それ、読みだすと、止まんないんだよね。暗くたつて、読めちゃうよね。読んじやうよね。わたしも昨日、そうだったもの。もう寝なくちゃ、と思いながら、寝床で読みつづけちゃったんだもの。

千秋とは十歳以上、年齢の開きがあるのに、なぜだか別デのことならすんなりわかりあえる気がしてしまう。

千秋ー、もう帰るわよー、と台所から和子の声がした。

はーい、と千秋の代わりに牧子がこたえる。

千秋は顔をあげ、

「牧子ちゃん、これ、貸して」といった。

「いいけど、持って帰って漫画なんか読んできると、お母さんに叱られるんじゃない？」
千秋が首を傾げる。

「じゃ、明日、ここで読む」と差し出してくる。

かがんで受け取りながら、

「明日も来るんだ」

ときくと、

「来るよ、だって夏休みだもん」

高らかに千秋がこたえた。

「あ、そうか、千秋は夏休みか。いいな、夏休み。いいな、子供は」

千秋がぴよんと立ち上がる。

「慎ちゃんが、明日プールに連れてってくれるんだって」

「慎也がプール」

「泳ぐの教えてくれるんだって」

「おいおい、あいつはそんなに暇なのか、大学へ行くつもりなら高2の夏休みは大事なはずだが？」
と思うがどうなんだろう。

「牧子ちゃんも一緒にいこうよ」

「え、だめだよ、わたしは明日、仕事だもん」

「えー夏休みないのー」

「ないよー、ないない。あたしはもう学校を卒業したんだからさ。立派な社会人なんだからさ。えへん」

● 牧子が手にした別デをなでる。

「えへん」

千秋が真似る。「えへん、えへん」

「えへん、えへん。大人はね、プールなんていつてらんないの。明日も仕事するんだかね。えへん」

「そういうながら、別デを千秋の目の前に掲げる。」

「わたしが明日行くのはこれを作っているところ。」

「そうか。」

「わたしはそういうところで働いていたんだ。」

「そうか。」

「そうだったんだ。」

「わたしは明日またそこへ行くんだ。」

「牧子は、それを楽しみにしている自分に気づいて驚いていた。わたしはプールへ行けなくてもぜんぜん残念に思っていない。それどころか仕事に行きたいと思っっている！」

「いやー、なんかすごいや。」

「牧子は目をぱちくりさせ、ぶるつと頭を振った。」

「ひよっとしたら、働きだしてから今まででいちばんやる気がみなぎっているような気が……しないでもない。」

「つまりあれかな、
4 わたしは、アポロに乗って月に行くわけではないけれども、ヒューストンでそれを支える仕事をしてい

る人たちみたいな仕事をしてるってことなんじゃないのかな、なんて調子いいことを思ってみたりして、ちょっとばかりにや
ついている。

千秋が、**B** 怪訝^{けげん}な顔で牧子を見る。

牧子はちよつとわざとらしいくらい、まじめな顔を作ってから、

「千秋、これ、わたしの部屋に置いとくからさ、明日、こっそり読みな。でも、ちゃんと宿題もするんだぞ」とささやく。

千秋がにやつきながら、うなずいた。

問 1 線 A・B の本文中の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 生返事

ア 自然な返事

エ うちとけた返事

イ 馬鹿^{ばか}にした返事

オ いい加減な返事

ウ 冷たい返事

B 怪訝な

ア 信用できないというような

エ 気味悪がっているような

イ 迷っているような

オ わけがわからないというような

ウ 恐^{おそ}れているような

問 2 線 1 「うーん、と牧子は考える」とあるが、克子の「漫画好きでしょう」という問いかけに牧子がすぐに答えられ

なかったのはなぜか。その理由を 60 字以内で説明しなさい。

問3

——線2「お世辞でもなんでもなく、牧子は本当にびっくりしたのだった」とあるが、なぜ牧子は「びっくりした」のか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 牧子が幼い頃に読んだ少女漫画は子供じみた恥ずかしいものだという印象だったが、《別冊デイジー》や《週刊デイジー》の漫画は大人も気に入るような洗練された内容であり、牧子も夢中になってしまったから。

イ 牧子が幼い頃に読んだ少女漫画は子供向けで飾りけのないものだったが、《別冊デイジー》や《週刊デイジー》の漫画は大人でも楽しめる色彩豊かなものであり、牧子も夢中になってしまったから。

ウ 牧子が子供の頃に読んだ少女漫画の内容は単純でつまらないものだったが、《別冊デイジー》や《週刊デイジー》の漫画は大人も興味を持つような複雑な内容であり、牧子も夢中になってしまったから。

エ 牧子は子供の頃に読んだ少女漫画を幼稚で地味だったと記憶していたが、《別冊デイジー》や《週刊デイジー》の漫画は大人向けに描かれた華やかなものであり、牧子も夢中になってしまったから。

オ 牧子が子供の頃と変わらず少女漫画は素朴で幼いものだが、《別冊デイジー》や《週刊デイジー》の漫画はその素朴さに懐かしさを感じられて大人でも楽しめる内容であり、牧子も夢中になってしまったから。

問4

——線3「なるべく家では仕事の話をしなくなかったし、ましてや少女漫画の話など決してするものか、と思っていた」とあるが、牧子がこのように考えるのはなぜか。その理由を90字以内で説明しなさい。

問5

次のア～オは、――線4「わたしは、アポロに乗って月に行くわけではないけれども、ヒューストンでそれを支える仕事をしている人たちみたいな仕事をしてる」について生徒たちが話し合っている場面である。本文の内容に基づいた発言として**適当でないもの**をア～オの中から**すべて**選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A ぼくはヒューストンを訪れたことがあるよ。そこにはアメリカ航空宇宙局の施設があるんだ。牧子は、編集部で雑用をこなす自分と、月には行かずヒューストンで働いている人を重ねているんだね。どちらも仲間を支える大切な仕事というところが共通していると思う。

イ 生徒B アポロに乗って月に行く人は、牧子にとっての編集部員ということになるね。直接月に行く宇宙飛行士と同じように、直接漫画と関わっている人たちだもの。

ウ 生徒C 牧子がヒューストンで宇宙飛行士を支える人たちと自分との共通点に気がついたのは、千秋が関係しているような気がするな。千秋と話すことで子供とは違って夏休みのない自分は社会で必要とされているんだと自覚したことから、つらくても働くことの大切さに気がついたんだよね。それに、《別冊デイジー》を通じて二人がわかり合えていたことも関わっているんじゃないかな。

エ 生徒D 牧子は、漫画が大好きで夢中になってしまう千秋のような子供の気持ちも、漫画を作るために忙しく働く編集者の大変さもわかるという自分の立場が編集者を支えており、それが自分だけの強みだと理解したんだね。

オ 生徒E 《別冊デイジー》に集中している千秋とのやりとりで、自分の仕事が直接人を喜ばせるものでなかったとしても、多くの人を夢中にさせるものを作る場所に自分が所属しているという自覚が、牧子の仕事に対する見方を変えたということか。

問6

この文章の表現についての説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ――線a「すいっとページをめくる」では、「すいっと」という擬態語によって千秋がページをめくる小気味よい様子が表現されている。

イ ――線b「嗅ぎつけられる」からは、別デをできるだけ家族の目に触れさせたくないと考えている牧子の心情が読み取れる。

ウ ――線c「ねえ、おもしろい？」とあるが、何度も「おもしろい？」と千秋に問う牧子の様子からは、千秋に直接「おもしろい」と言っただけという牧子の心情が読み取れる。

エ ――線d「あっさりまた別デの世界に戻っていった」は、牧子の話に興味があるのに、それを素直に認めることができず、漫画に集中するふりをしている千秋の様子が比喩的に表現されている。

オ ――線e「牧子が手にした別デをなでる」は、仕事に対する誇りが牧子に芽生えはじめたということを象徴的に表現している。

三 次の各文の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 浅学^{せんがく}ヒサイの身ですが全力をつくします。
- 2 亡父のイシ^{いし}を継^ついで医者になった。
- 3 経済成長を金科ギョクジヨウ^{きんぎょくくじよう}としていた時代。
- 4 亀^{かめ}の甲^{こう}より年のコウ^{こう}。
- 5 全国でも有数のケイシヨウ地^{けいしやうち}。
- 6 次の種目は徒キヨウソウ^{たきやうそう}だ。
- 7 中流カイキユウ^{ちゅうりゅうかいきゆう}の家庭で育った。
- 8 環境問題^{かんきょうもんだい}を標題とするコウエン^{こうえん}を聞きに行く。

問題は、これで終わりです。



[illegible]